

訪問介護事業所で働く介護職に必要な家政学の内容検討

— 介護職への自記式質問票調査の結果から —

Home economics necessary for care workers working in home visit care businesses

— From the result of survey targeted at care workers —

福田 明 隣谷 正 範
Akira FUKUDA Masanori TONARIYA

要旨

訪問介護実習や訪問介護の場では家事援助に関する教育・研修の重要性が指摘されているにもかかわらず、介護福祉士養成教育の新カリキュラムでは、一般的に旧カリキュラムの「食品の成分と保存・管理」「調理器具・設備」や「住居管理」「防災」等が削除された、あるいは関連が弱くなったことが明らかになっている。そこで、本研究では、実際に訪問介護事業所で働く介護職が仕事上「役立つ」と思う家政学の内容把握を行い、その要因や新カリキュラムの中身との比較について考察し、介護福祉士養成教育への配慮点と職場での研修内容を検討する資料とすることを目的とした。

松本市・安曇野市・塩尻市にある計79の訪問介護事業所に質問票を郵送し、有効回答が得られた167人分のデータを分析した。調査では、旧カリキュラムの「家政学概論」「家政学実習」計68項目について、現在の仕事に「役立つ」～「役立つしない」の4段階の選択肢で回答してもらい、「役立つ」と回答した人の割合に焦点をあてた。

「家政学概論」では、家庭生活11項目が平均29.9%で下位にとどまったのに対し、事故防止(68.9%)、バリアフリーへの対応(68.3%)、加齢・障害と食生活のあり方(67.1%)、食品の成分と保存・管理(65.9%)、栄養障害・生活習慣病(65.3%)等が上位を占めた。「家政学実習」では、被服生活8項目が平均25.0%で下位にとどまったのに対し、調理実習(69.5%)、緊急時連絡(64.7%)、高齢者・障害者に適した住宅改善事例(64.1%)、消火(60.5%)、避難誘導(59.9%)等が上位を占めた。

居宅介護の方向性を重視する国の政策動向のなか、訪問介護事業所に再就職する介護職や訪問介護実習を行う学生の現状を鑑みると、今後、住環境整備、緊急時の対応、調理実習、食生活に関する内容について、介護福祉士養成教育や職場での研修のなかで、その不足分を補足または強化していく必要性が示唆された。

【キーワード】 家政学、訪問介護、介護職、介護福祉士、自記式質問票調査

I. 研究の背景と目的

介護福祉士の活躍の場は、施設だけでなく、居宅にもある。その代表的なものに訪問介護がある。介護保険法でも、訪問介護は「介護福祉士その他厚生労働省令で定める者により行われる」と介護福祉士を明確に位置づけている¹⁾。また、施設介護から居宅介護へという流れのなかで、介護福祉士養成教育においても、2000(平成12)年度から訪問介護実習が義務化された。しかし、当時の厚生労働省指定カリキュラムでは、居宅介護に必要な知識や技術を抽出し、統合・応用して利用者の生活をトータルに援助する視点や能力を育むには、不十分といわざるを得ないとの指摘もあった²⁾。

そうしたなか、2009(平成21)年度からは、介護福祉士養成教育で新カリキュラムが始まった。それに伴い、家庭生活・食生活・被服生活・住生活から成る「家政学概論」(60時間)と「家政学実習」(90時間)はともに姿を消した。そして、新たに設けられた生活支援技術のなかを中心に「家政学概論」や

「家政学実習」の内容がいくつか組み込まれた。しかし、実際には、その不足分をどのように補っていくのかについては、各介護福祉士養成校の判断に任されることになった。例えば、旧カリキュラムで必修であった調理実習が選択科目に変更されたり、2年間の授業のなかで8回程度行われていた調理実習が2回程度に縮小されてしまったりした介護福祉士養成校もある。

また、中川・神部・奥田ら(2009)は、家政学系の授業内容に関する旧新カリキュラムの比較を表で示している。それによれば、「生活設計」「生活時間」「家庭の情報処理」「財産及び消費生活に関する法規」(家庭生活分野)、「食品の成分と保存・管理」「調理器具・設備」「食品衛生に関する法規」(食生活分野)、「被服の素材と品質表示」における「被服素材の特徴と鑑別実験」や「被服管理実習」における「漂白」「しみ抜き」「のり付け」「仕上げ」「保管」(被服生活分野)、「住居管理」における「水まわり」「ガス・電気用具等の管理」「ゴミ処理」や「防災」におけ

る「住居安全のための工夫」「緊急時連絡」「避難誘導」「消火」(住生活分野)が新カリキュラムにおいて削除された、あるいは関連が低い項目になったことを明らかにしている³⁾。

しかし、こうした旧カリキュラムの内容を新カリキュラムのなかで脱落あるいは不足させてもかまわないのであろうか。実際には、学生の多くは生活経験が未熟で、調理等の生活支援に対して力不足⁴⁾、訪問介護実習では家事経験が少ないことから家事援助に対して不安を感じる学生が多い⁵⁾といった指摘もみられる。さらに、居宅で暮らす要介護高齢者は、掃除、買い物、調理といった生活支援ニーズが高いにもかかわらず⁶⁾、それらの家事援助に関する訪問介護員への教育は特に不十分で、個々の訪問介護員の家事経験にのみ委ねられているのが現実との指摘もある⁷⁾。

本来であれば、これらの指摘の克服に向けた教育や研修が前面に出てくるのではなかろうか。田崎・前川(2007)も、介護福祉士養成校で家事経験の不足を補うような実習教育の必要性を指摘している⁸⁾。また、中山・下満(2009)は、研修内容を検討する上で、訪問介護の現場で経験を積んだ人々の考えや意向を参考にすることの重要性を指摘している⁹⁾。しかし、実際は、訪問介護実習終了後に学生を対象にした家政学に関する調査はあるものの¹⁰⁾、訪問介護事業所で働く介護福祉士やホームヘルパー2級取得者等(以下、介護職)を対象にした家政学の有用性の観点からの調査研究は、筆者らが文献データベースCiNiiやScholar等で検索した範囲では見当たらなかった(2013年1月29日現在)。

そこで本研究では、訪問介護事業所で働く介護職が仕事上「役立つ」と思う家政学の内容把握を行い、その要因や新カリキュラムの中身との比較について考察し、介護福祉士養成教育への配慮点と職場での

研修内容を検討する資料とすることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 調査対象事業所とその選定方法

筆者らが勤務する短大の周辺地域にある訪問介護事業所を調査対象としたかったため、「長野県介護サービス情報の公表システム」を用いて、長野県松本市・安曇野市・塩尻市にある計79の訪問介護事業所を抽出した(2012年6月1日現在)。

このシステムを活用したのは、①介護保険法で作成が義務付けられ、インターネット上で介護保険法に基づくサービス事業所・施設の情報をほぼ網羅できること、②年に1回調査が行われ、その情報に基づき年に1度更新されるという情報の新しさがあること、という2つの理由があげられる¹¹⁾。

2. 調査方法と分析対象

抽出した79事業所すべてに質問票を各5部ずつ郵送し、介護職への自記式質問票調査を行った(2012年6月11～30日)。なお、倫理的配慮として、本研究の趣旨説明を質問票に明記し、これに同意を得られる人から匿名で回答を得た。その結果、質問票の回収数は395票中167票(回収率42.3%)で、いずれも有効回答であった。そこで、この167人(女性154人・男性13人、平均年齢44.8歳±11.0)から得られたデータを本研究の分析対象とした。

対象となる介護職は、介護福祉士国家試験合格者が53.3%で最も多く、以下、ホームヘルパー2級が28.7%、介護福祉士養成校卒業者が15.6%と続いた(表1)。現在の職場での勤続年数をみると、5～10年未満が31.7%で最も多かった。これに10年以上の24.6%を加えると5年以上が6割近くを占めた(表2)。

表1 分析対象となる介護職の内訳

N=167

	度数(人)	割合(%)
介護福祉士国家試験合格者	89	53.3
ホームヘルパー2級	48	28.7
介護福祉士養成校卒業者	26	15.6
ホームヘルパー1級	2	1.2
その他	2	1.2
合計	167	100

※その他は記載なく、不明である。

表 2 分析対象者の現在の職場における勤続年数 N=167

	度数 (人)	割合 (%)
10 年以上	41	24.6
5~10 年未満	53	31.7
3~5 年未満	27	16.2
1~3 年未満	29	17.4
1 年未満	17	10.2
合 計	167	100

3. 調査内容と分析方法

本調査では、厚生労働省通知に示された旧カリキュラムの授業内容のうち、「家政学概論」43項目と「家政学実習」25項目の計68項目について、それぞれ現在の仕事に「役立つ」「やや役立つ」「やや役立つ」「役立つ」「役立つ」の4段階の選択肢で回答してもらい、単純集計を行った（詳細については、本論文の末尾に掲載した資料1・資料2を参照されたい）。その上で、「役立つ」と思う人の割合に焦点をあてて検討した。

その理由は、筆者らが考案した「介護福祉士に必要な知識・技術を導き出す思考過程」において、次のように考えているからである。つまり、「仕事で〇〇をしたい、〇〇をしなければならない」→「しかし、××が問題だ」→「では、どうやって××の問題を乗り越えていくか」→「それには、□□の知識・技術が役立つ」→「だから、□□の知識・技術が必要」とする思考過程から、本調査で「役立つ」と回答された内容（項目）が介護職にとって必要な知識・技術へと結びつくと考えたからである¹²⁾。

なお、調査結果については、質問項目のうち、どの項目について「役立つ」と思う人の割合が多いのか、視覚的にもわかるようグラフで示した。

Ⅲ. 結果

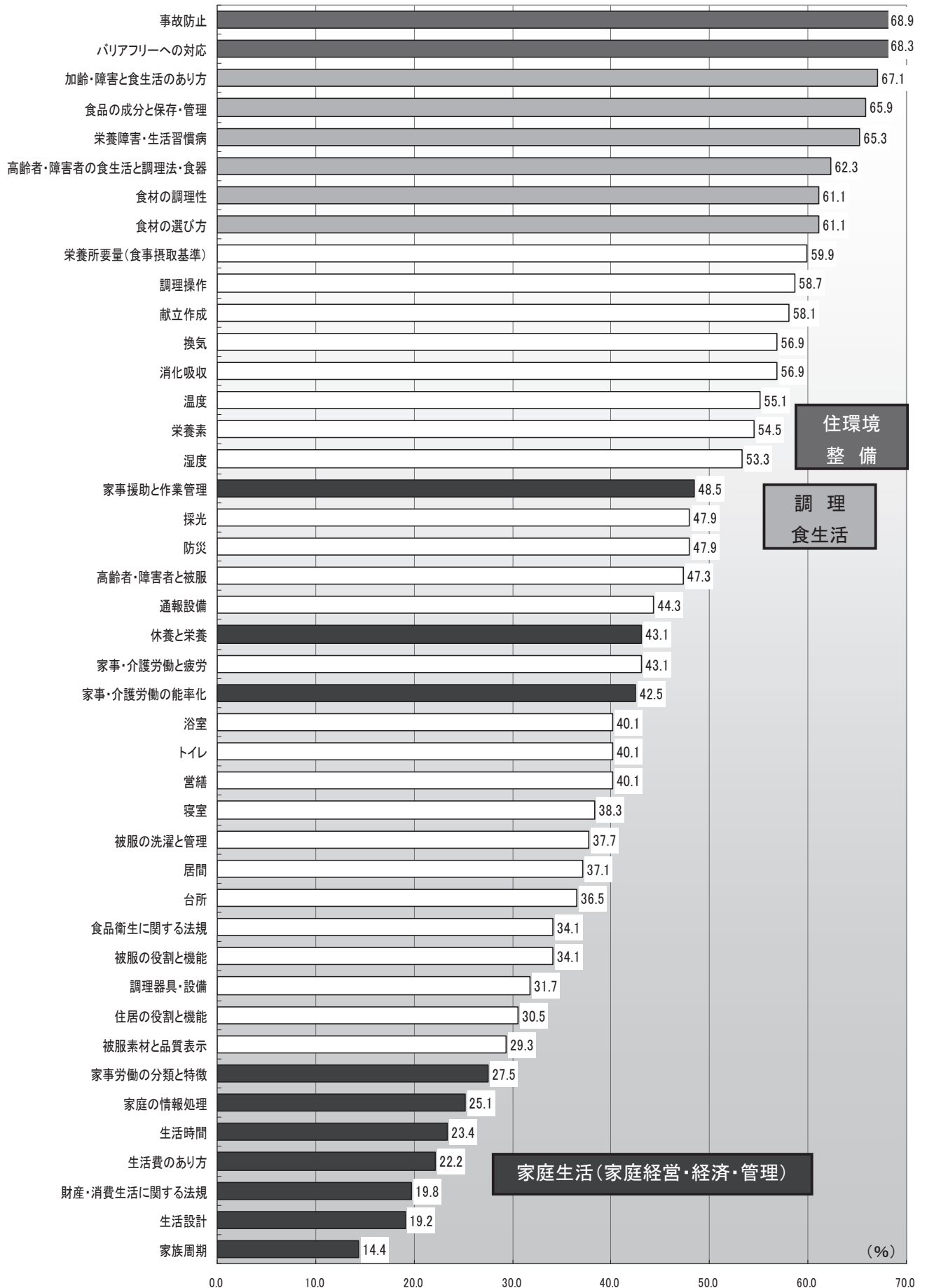
1. 「家政学概論」の役立ち状況（図1）

「家政学概論」43項目で「役立つ」と思う人の割合は平均44.6%であった。その中身をみると、家族周期が14.4%、生活設計が19.2%、財産・消費生活に関する法規が19.8%、生活費のあり方が22.2%で家庭経営・家庭経済に関する内容が下位を占めた。これらに家庭管理7項目を加えた家庭生活11項目でも、その平均は29.9%と低い水準にとどまった。

これら下位項目に対して、事故防止が68.9%、

バリアフリーへの対応が68.3%で上位1・2位となった。以下、加齢・障害と食生活のあり方が67.1%、食品の成分と保存・管理が65.9%、栄養障害・生活習慣病が65.3%、高齢者・障害者の食生活と調理法・食器が62.3%、食材の調理性、食材の選び方がともに61.1%と続いた。これら上位3～8位は、調理や食生活に関する内容であった。

図1 「家政学概論」43項目で「役立つ」と思う内容



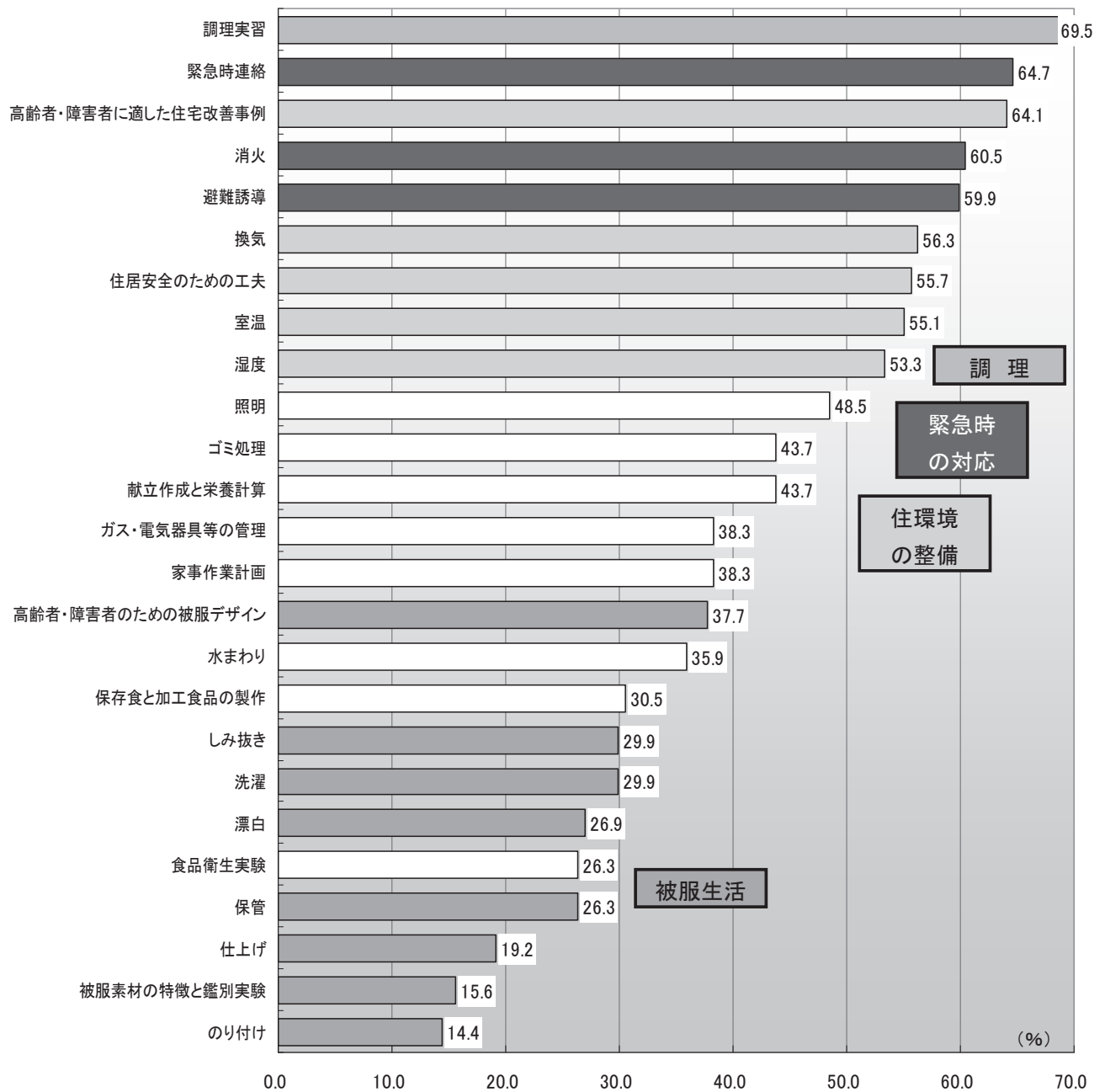
2. 「家政学実習」の役立ち状況 (図2)

「家政学実習」25項目で「役立つ」と思う人の割合は平均41.8%であった。その中身をみると、のり付けが14.4%、被服素材の特徴と鑑別実験が15.6%、仕上げが19.2%、保管が26.3%等、被服生活に関する内容が下位を占めた(被服生活8項目の平均25.0%)。

これら下位項目に対して、調理実習は69.5%で

1位となった。以下、緊急時連絡が64.7%、高齢者・障害者に適した住宅改善事例が64.1%、消火が60.5%、避難誘導が59.9%、換気が56.3%、住居安全のための工夫が55.7%、室温が55.1%、湿度が53.3%と続いた。これら上位2~9位は、防災等の緊急時対応や住環境整備に関する内容であった。

図2 「家政学実習」25項目で「役立つ」と思う内容



IV. 考察

1. 本研究の意義

介護福祉士として習得しなければならない知識や技術とはどのようなものであるかという原点に立ち、より具体的に内容を収集する必要があることは、すでに指摘されている¹³⁾。こうした指摘を受け、介護福祉士に必要な家政学は何かに関する学生や教員を対象にした調査はみられるものの、職場で働く介護福祉士自身への調査は少ない^{14) 15) 16) 17)}。そこで、中川ら(2009)は、介護福祉士養成教育のための家政学を検討するにあたり、実際の介護現場に携わる介護福祉士の考え方を把握することの重要性を指摘している¹⁸⁾。筆者らも、この考え方を重視し、実際に職場で働く介護福祉士への質問票調査を実施してきた^{19) 20) 21)}。

ただし、筆者らは「介護福祉士に必要な家政学の内容は職場別に異なる」という仮説を抱いていたため、前回は介護老人福祉施設と介護老人保健施設を、前回は認知症対応型共同生活介護事業所(認知症グループホーム)を、そして今回は訪問介護事業所というように、職場別に検討してきた。今回は、この仮説に迫る基礎研究の第3弾であり、介護福祉士に必要な家政学の内容について職場別に比較検討する際の資料になるという点でも意義がある。

2. 役立ち度が高かった要因

以下、「家政学概論」「家政学実習」計68項目のなかで、「役立つ」と思う人の割合が約5~7割と上位を占めた項目について、1)「事故防止」「バリアフリーへの対応」「緊急時連絡」「消火」「避難誘導」「住環境整備」と、2)「調理実習」「食生活」の2群に大別し、それぞれ、なぜ、役立ち度が高かった

のか、その要因を考察していく。

1) 「事故防止」「バリアフリーへの対応」「緊急時連絡」「消火」「避難誘導」「住環境整備」

厚生労働省(2009)は、家庭内事故死の状況を報告している(表3)。それによると、65歳以上の家庭内事故死数は10150人にのぼり、全体(0~80歳以上)の約8割にあたる。なかでも、ヒートショックと思われる溺死・溺水や食物等による窒息、廊下等での転倒・転落によるものが上位3位までを占めている²²⁾。これら上位3位までのうち、窒息以外は住環境に関連したものであることに注目したい。つまり、前川・神保(2008)が指摘するように、住宅改修や住まいの工夫をすることによって生活空間を安全・安楽にすることが重要になってくる²³⁾。

また、訪問介護は1人で訪問する場合が多く、万が一の地震や火災等の発生に備えておく必要もある。実際に、今回の調査対象地域の1つであった松本市では、2011(平成23)年6月30日にマグニチュード5.4、最大震度5強の松本地震が発生している。同年3月11日の東日本大震災(マグニチュード9.0、最大震度7)や翌3月12日の長野県北部地震(マグニチュード6.7、最大震度6強)も含め、そうした地震等の緊急時における介護職の危機意識の高まりとそれへの対応がますます重要になってきている。

本調査結果において、事故防止、バリアフリーへの対応、高齢者・障害者に適した住宅改善事例、住居安全のための工夫、換気・室温・湿度等の住環境整備や、緊急時連絡、消火、避難誘導といった緊急時の対応について「役立つ」と思った人が多かったのは、以上のような背景も関係したと考えられる。

表3 家庭内事故死の状況

家庭内事故死のうち 65歳以上の人が約8割		総数(0~80歳以上)		うち65歳以上		
		A	割合	B	割合	B/A×100
家庭内事故死(合計)		12873人	(100%)	10150人	(100%)	(78.8%)
内 訳	溺死・溺水(浴槽内等)	3964人	(30.8%)	3472人	(34.2%)	(87.6%)
	窒息(食物等)	3856人	(30.0%)	3232人	(31.8%)	(83.8%)
	転倒・転落(床・廊下、階段等)	2676人	(20.8%)	2142人	(21.1%)	(80.0%)
	煙・火および火災への曝露	1162人	(9.0%)	703人	(6.9%)	(60.5%)
	有害物質(ガス等)による中毒・曝露	555人	(4.3%)	141人	(1.4%)	(25.4%)
	熱・高温物質(熱湯等)との接触	121人	(0.9%)	106人	(1.0%)	(87.6%)
	その他の事故	539人	(4.2%)	354人	(3.5%)	(65.7%)

※厚生労働省大臣官房統計情報部:平成21年人口動態統計の年間推計に基づき作成した。

2) 「調理実習」「食生活」

訪問介護の提供内容をみると、掃除が42.4%で最も多く、次いで調理が33.5%という報告がある²⁴⁾。また、訪問介護における調理は、1件の利用者宅で掃除、洗濯、買い物等、他のサービスとともにを行う機会も多い²⁵⁾。それにもかかわらず、2012(平成24)年の介護報酬改定では、例えば、生活援助の「30分以上60分未満」(229単位/回)が「20分以上45分未満」(190単位/回)に短縮された。このために、事実、「まとめてつくるおかずも1品減らさざるを得ない」「スーパーが家の近くにない過疎地では、買い物の行き帰りだけで時間が足りない…」等、介護職たちの切実な意見が寄せられている²⁶⁾。

さらに、家事援助が必要な利用者がすべて介護職に全面的に任せているわけではないとの指摘があるように²⁷⁾、調理においても利用者の思いや能力に応じて本人の「したいこと」や「できるところ」は行っていただく等、利用者と介護職が一緒に調理を進めている場合もある。

したがって、介護職には、頻度が高い調理について、限られた時間内で手際良く行う能力とともに、実際の調理場面で利用者が行える内容を見極めるアセスメント力も必要になってくるといえる。田崎・前川(2007)も、「利用者とのコミュニケーションを取りながら、時間内に生活支援を行う演習を行うべき」という意見が多く介護職から出されたと報告している²⁸⁾。

以上に加え、居宅で生活する高齢者は、複数の現疾患や既往歴がある人も多く、何が好みかという嗜好も人それぞれである。それだけに、利用者にとってどのような食事内容が適切かというアセスメント力も重要になってくる。保良(2000)も、特別食・病人食が必要とされる場合の食材選びや調理の仕方等は、対象者の食事の楽しみや満足感等との兼ね合いからも、専門的知識・技術が要求されると指摘している²⁹⁾。

こうした訪問介護での調理の難しさとその重要さゆえに、本調査結果では調理実習を筆頭に加齢・障害と食生活のあり方、食品の成分と保存・管理、栄養障害・生活習慣病といった項目についても「役立つ」と思った人が多かったと考えられる。

3. 介護老人福祉施設・介護老人保健施設との比較

調理実習については、2010(平成22)年度、筆者らが実施した介護老人福祉施設と介護老人保健施設で働く介護福祉士計262人への調査では、「役立つ」と思うのが10.7%で³⁰⁾、本調査結果の69.5%に比べ、大きな隔たりがみられた。

このことから、施設と居宅に必要な家政学には違いがあり³¹⁾、共通して必要な内容と職場別に必要な内容を整理する必要性を示唆する形になったと思われる。

V. 結論

介護福祉士養成課程に新カリキュラムが導入され、一般的に旧カリキュラムの「住居管理」や「防災」、「食品の成分と保存・管理」、「調理器具・設備」等については削除された、あるいは関連が弱くなったことが明らかになった。しかし、本調査結果からは、訪問介護事業所で働く介護職の多くが住環境整備や緊急時の対応、調理実習、食生活を中心に現在の仕事に「役立つ」と思っている傾向が明らかになり、新カリキュラムの中身と本調査結果には乖離があることが示唆された。

実際には、毎年、介護福祉士養成校卒業後、介護老人福祉施設や介護老人保健施設への就職が平均して約6割と多いが³²⁾、なかには訪問介護事業所に就職する学生もいる。また、施設勤務後、訪問介護事業所に再就職する介護職もいる。さらに、国の政策動向は居宅介護の方向性を重視しており、介護福祉士養成校では施設実習に加え、訪問介護実習が存在することも忘れてはならない。

したがって、こうした現状から鑑みても、本調査結果に基づき、住環境整備、緊急時の対応、調理実習、食生活を中心に介護福祉士養成教育や職場での研修のなかで、その不足分を補足または強化していく必要があると思われる。

今後は、本調査で「役立つ」との回答が低かった家庭経営・家庭経済や被服生活に関する内容について本当に役立ち度が低いのかについても、実際に介護職への聞き取り調査を行うなかで明らかにする等、本研究の限界を補う必要がある。

謝辞

末筆ながら、本調査・研究にあたり、ご協力くださった訪問介護事業所で働く職員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 菊池信子：福祉実践をサポートする介護概論。保育出版社，102(2011)。
- 2) 奥田都子・石野育子・内藤初枝ほか：介護福祉士養成における居宅生活援助教育に関する研究，平成17年度教員特別研究報告書，1(2005)。
- 3) 中川英子・神部順子・奥田都子ほか：生活支援と家政学—新カリキュラムにおける家政学教育の課題。介護福祉学，16(2):194-195(2009)。

- 4) 菊池啓子・皆川留美：介護福祉士養成における家政学実習内容の検討－新しい調理実習への取り組み，介護福祉教育，13：67－70（2007）。
- 5) 桂木奈巳・中川英子・百田裕子ほか：介護福祉士養成における家政系科目の授業内容の検討2－居宅介護実習に関する学生アンケートから，日本家政学会第55回大会発表要旨集，252（2003）。
- 6) 村田順子・田中智子：在宅要介護高齢者の生活支援のあり方に関する研究－東大阪における事例調査，日本家政学会誌，Vol.56 No.5：341（2005）。
- 7) 八田和子：訪問介護における家事援助の実態と自立支援の課題－訪問介護利用者・訪問介護員調査をふまえて，大阪健康福祉短期大学紀要，第2号：68（2004）。
- 8) 田崎裕美・前川有希子：介護福祉のための家政学実習－食生活領域，静岡福祉大学紀要，第3号：75（2007）。
- 9) 中山慎吾・下満ゆかり：訪問介護事業所におけるサービソ責任者の学習ニーズ－デルファイ法による研究，社会福祉学，Vol.50-2：68（2009）。
- 10) 角間陽子：介護福祉士養成教育における家政学実習の効果－訪問介護での食生活援助から，松本短期大学研究紀要，第14号：45-52（2005）。
- 11) 福田明・上延麻耶：高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究：住生活分野，松本短期大学研究紀要，第20号：54（2011）。
- 12) 福田明・上延麻耶：認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）で働く介護福祉士に必要な家政学の内容検討－介護福祉士への自記式質問票調査の結果から，松本短期大学研究紀要，第21号：27（2012）。
- 13) 内藤初枝：介護福祉士養成科目「家政学実習Ⅱ 栄養・調理」の教育内容に関する検討，1（2004）。
- 14) 杉永孝子・中村敦子・久保田トミ子：介護福祉士養成における家政系教育の現状と課題，介護福祉教育，4：38－41（1999）。
- 15) 神部順子・奥田都子・熊本裕子ほか：介護福祉士養成教育のための「家政学」関連科目のありかた－学生意識調査結果からの授業内容の検討，日本家政学会誌，54(6)：501－510（2003）。
- 16) 奥田都子・石川周子・熊本裕子ほか：介護福祉士養成教育における家政系教育－全国養成校教員調査にみる現状と課題，介護福祉学，10（1）：19－32（2003）。
- 17) 齋藤佳子・横本俊美：新カリキュラムにおける生活支援技術（家政系）の教育内容の検討－卒業生へのアンケート調査から，第16回日本介護福祉教育学会プログラム発表要旨集，30－31（2009）。
- 18) 中川英子・神部順子・奥田都子ほか：生活支援と家政学－新カリキュラムにおける家政学教育の課題，介護福祉学，16（2）：207（2009）。
- 19) 上延麻耶・福田明：高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－家庭生活，食生活，被服生活，松本短期大学研究紀要，第20号：3－8（2011）。
- 20) 福田明・上延麻耶：高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－住生活分野，松本短期大学研究紀要，第20号：53－59（2011）。
- 21) 福田明・上延麻耶：認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）で働く介護福祉士に必要な家政学の内容検討－介護福祉士への自記式質問票調査の結果から，松本短期大学研究紀要，第21号：25－34（2012）。
- 22) 厚生労働省：平成21年人口動態統計の年間推計（2009）。
- 23) 前川有希子・神保昌子：介護福祉士養成教育における生活環境の学習－住環境・地域環境を理解するために，静岡福祉大学紀要，第4号：94（2008）。
- 24) 厚生労働省：平成21年介護サービス施設・事業所調査結果の概況（2009）。
- 25) 田崎裕美・前川有希子：介護福祉のための家政学実習－食生活領域，静岡福祉大学紀要，第3号：78（2007）。
- 26) 信濃毎日新聞：介護保険－生活援助を軽んじるな，朝刊：3（2012. 2. 8）
- 27) 八田和子：訪問介護における家事援助の実態と自立支援の課題－訪問介護利用者・訪問介護員調査をふまえて，大阪健康福祉短期大学紀要，第2号：62（2004）。
- 28) 田崎裕美・前川有希子：介護福祉のための家政学実習－食生活領域，静岡福祉大学紀要，第3号：75（2007）。
- 29) 保良昌徳：ホームヘルパーの業務分析と介護福祉業務，沖縄国際大学社会文化研究，Vol.3 No.1：16（2000）。
- 30) 上延麻耶・福田明：高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－家庭生活，食生活，被服生活，松本短期大学研究紀要，第20号：3－8（2011）。
- 31) 田崎裕美・前川有希子：介護福祉のための家政学実習－食生活領域，静岡福祉大学紀要，第3号：73（2007）。
- 32) 日本介護福祉士養成施設協会：かいようきょう，第36号：16（2010）。

N = 167

数値は%を示す

資料1

「家政学概論」各43項目の役立ち度の割合の結果

大項目	家庭経営	家庭経営	家庭経営	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	11項目				
家庭生活	小項目	家族周期	生活設計	生活費のあり方	生活時間	家庭の情報処理	家事労働の分類と特徴	家事・介護労働の効率化	調理	調理性	高齢者・障害者の食生活と調理法・食器	食生活と健康	食品の成分と保存・管理	高齢者・障害者と栄養	13項目
	役立ち	14.4	19.2	19.8	23.4	25.1	27.5	42.5	43.1	43.1	43.1	48.5	29.9	67.1	56.7
	やや役立ち	43.7	40.1	47.3	45.5	43.1	40.1	40.1	40.7	38.9	41.3	37.7	42.2	28.1	33.5
	やや役立たない	26.9	28.1	25.1	22.8	25.1	24.6	24.6	13.8	13.2	12.6	11.4	20.6	4.8	8.6
	役立たない	13.2	11.4	6.0	7.2	5.4	6.6	6.6	2.4	4.2	2.4	2.4	6.2	0	0.9
無回答	1.8	1.2	1.8	1.8	1.2	1.2	1.2	0.6	0.6	0.6	0.0	1.1	0.0	0.4	

大項目	調理器具・設備	食品衛生に関する法規	身体の機能と栄養	調理	調理	高齢者・障害者と栄養	調理	調理性	調理性	高齢者・障害者の食生活と調理法・食器	食生活と健康	食品の成分と保存・管理	高齢者・障害者と栄養	13項目
食生活	小項目	食品衛生に関する法規	栄養素	消化吸収	献立作成	調理操作	食材の選び方	食材の調理性	食生活と健康	栄養障害・生活習慣病	食品の成分と保存・管理	高齢者・障害者と栄養	高齢者・障害者と栄養	平均
	役立ち	34.1	54.5	56.9	58.1	58.7	61.1	61.1	62.3	65.3	65.9	65.9	67.1	56.7
	やや役立ち	45.5	38.3	34.1	32.3	31.1	29.9	30.5	31.1	28.7	25.1	25.1	28.1	33.5
	やや役立たない	19.2	6.6	8.4	7.8	9.0	7.8	7.2	5.4	4.8	7.2	7.2	4.8	8.6
	役立たない	3.0	0.6	0.6	1.8	1.2	0.0	1.2	0.6	0.6	0.0	0.0	0	0.9
無回答	0.6	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.8	1.8	0.0	0.4	

大項目	被服素材と品質表示	被服の役割と機能	被服の洗濯と管理	4項目
被服生活	小項目	被服の役割と機能 <td>高齢者・障害者と被服 <td>平均</td> </td>	高齢者・障害者と被服 <td>平均</td>	平均
	役立ち	34.1	47.3	37.1
	やや役立ち	45.5	37.7	44.3
	やや役立たない	18.0	15.6	16.8
	役立たない	2.4	0.0	1.8
無回答	0.0	0.0	0.0	

大項目	住居の役割と機能	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	住居の管理と安全	住居の管理と安全	住居の管理と安全	住居の管理と安全	15項目
住生活	小項目	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	居室	平均
	役立ち	36.5	37.1	38.3	40.1	40.1	44.3	47.9	47.9	47.9	53.3	55.1	56.9	47.0
	やや役立ち	49.7	49.1	48.5	47.9	47.9	44.9	41.3	41.3	41.3	41.3	38.3	35.9	42.0
	やや役立たない	12.0	12.6	11.4	11.4	11.4	8.4	9.6	10.2	4.8	4.8	6.0	7.2	9.8
	役立たない	1.8	1.2	1.8	0.6	0.6	1.8	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.0	1.0
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

資料2

「家政学実習」各25項目の役立ち度の割合の結果

N = 167
数値は%を示す

大項目	家事作業計画	1項目
家庭生活	平均	
役立ち	38.3	38.3
やや役立ち	37.7	37.7
やや役立たない	21.6	21.6
役立たない	1.8	1.8
無回答	0.6	0.6

大項目	食品衛生実験	保存食と加工食品の製作	献立作成と栄養計算	調理実習	4項目
食生活	平均				
役立ち	26.3	30.5	43.7	69.5	42.5
やや役立ち	47.3	43.1	36.5	23.4	37.6
やや役立たない	22.2	21.6	12.6	4.8	15.3
役立たない	3.6	4.2	6.0	2.4	4.0
無回答	0.6	0.6	1.2	0.0	0.6

大項目	被服管理実習 のり付け	被服素材の特徴と鑑別実験	被服管理実習 仕上げ	被服管理実習 保管	被服管理実習 漂白	被服管理実習 洗濯	被服管理実習 しみ抜き	高齢者・障害者のための被服デザイン	8項目
被服生活	平均								
役立ち	14.4	15.6	19.2	26.3	26.9	29.9	29.9	37.7	25.0
やや役立ち	43.7	47.9	46.7	47.3	49.7	45.5	46.7	42.5	46.3
やや役立たない	29.3	28.1	24.0	19.8	16.8	20.4	18.6	16.2	21.6
役立たない	12.0	6.0	9.6	6.0	6.0	4.2	4.8	3.0	6.4
無回答	0.6	2.4	0.6	0.6	0.6	0.0	0.0	0.6	0.7

大項目	住居管理 水まわり	住居管理 ガス・電気器具等の管理	住居管理 ゴミ処理	室内環境整備 照明	室内環境整備 湿度	室内環境整備 室温	防災 住居安全のための工夫	室内環境整備 換気	防災 避難誘導	防災 消火	高齢者・障害者にとって適切な住宅改善事例	防災 緊急時連絡	12項目
住生活	平均												
役立ち	35.9	38.3	43.7	48.5	53.3	55.1	55.7	56.3	59.9	60.5	64.1	64.7	53.0
やや役立ち	47.9	43.1	43.7	40.7	38.3	37.7	35.9	37.1	33.5	32.9	26.3	30.5	37.3
やや役立たない	14.4	16.8	10.8	9.6	7.8	6.6	7.8	6.0	5.4	5.4	7.8	4.2	8.5
役立たない	1.8	1.8	1.8	1.2	0.6	0.6	0.6	0.6	1.2	1.2	1.2	0.6	1.1
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0